

弁護士としてはじまる第二の人生

会員 田中 幸徳



1 弁護士を目指すまで（自己紹介）

私は、大学卒業後は損害保険会社に就職し、代理店営業や企業営業を担当したり、官公庁への出向を経験したりした。仕事をするなかで「自分の力で直接人の役に立てる仕事をしたい」という想いが強くなり、会社の合併という環境の変化も相まって、司法試験を目指すことを決意し、8年間勤めた会社を退職した。そして、司法試験の勉強をするなら実務を学びながらがいいと思い、都内の法律事務所のパラリーガルに転職した。そのころにはすでに結婚し、子どもも2人いたことから、専業受験生になるという選択肢はなく、働きながら通える筑波大学法科大学院に進学した。こうして、日中はパラリーガルとしてフルタイムで働き、夜は司法試験受験を目指す学生としての生活が始まった。

2 司法試験合格まで

筑波大学法科大学院では、自分と同じように、様々なバックグラウンドを持つ仲間に出会うことができ、とても刺激を受けた。もっとも、仲間が次々に合格していくなか、私は司法試験合格までには時間がかかってしまった。

同大学院卒業後、勉強が手詰まりになった際には、司法試験の合格を目指す仲間が集まる外部のゼミの門をたたいた。そこで仲間と切磋琢磨したことで、令和5年に4回目の受験でやっと合格した。

合格に時間がかかった分、特に家族には負担をかけたと思うが、筑波大学法科大学院やゼミでの出会いは、かけがえのないものとなっている。

3 弁護士になってから

司法修習後、私は元居た法律事務所に弁護士とし

て戻ることにした。私は特に就職活動もせず、出戻り一択だったので、「他にも選択肢があったのでは」と聞かれることも多かった。しかし、私は今いる事務所の理念に共感していたから弁護士として同じ事務所で働きたいと思っただけで、事務所の将来性も感じているので、まったく迷いがなかった。また、職場の方々に応援してもらったからこそ法科大学院に通学でき、司法試験に合格できたので、その恩返しをしたい思いもある。

執筆時点（7月初旬）はまだ先輩弁護士が面談に同席してくださっている状態なので、事務所の戦力にはなれていないが、少しずつ依頼者とのやりとりを任せてもらえる場面も増えてきた。「弁護士にとっては100件のうちの1件でも、依頼者にとってはその1件がすべてである」とよく言われるが、依頼者対応を通して、まさに実感しているところである。

4 今後の目標

弁護士によって考え方は様々だと思うが、私は、私を頼ってくれた人に対して「自分は専門外だから」と相談を断ることがない弁護士でありたいと思っている。ゼネラリストとしてどの分野でも一線級の力をつけつつ、自分の興味領域についてはスペシャリストとして突出できるよう自己研鑽に励んでいきたい。

また、社会人として色々な経験をしてきた自分だからこそできること（自分に依頼してもらうことの付加価値）は何かを追求していきたい。

今は、弁護士として第二の人生をスタートできたことを大変嬉しく思っている。これからも初心を忘れず、依頼者のために何ができるかを常に考えながら、努力を続けていきたいと思っている。